

アトリエ 琉游舎 だより 33号

2018年8月15日発行

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
 琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

夏を惜しむ

秋来ぬと 目にはさやかに見えねども 風の音にぞ おどろかれぬる
 (「古今和歌集」秋歌上169 藤原敏行)

8月19日(日)のお盆施餓鬼法要は10時半からに時間が変更になりました

8月・9月のスケジュール

			木	金	土	日			
			16	17	18	19			
						お盆施餓鬼法要 10時半から			
月	火	水	20	21	22	23	24	25	26
						映画会 13:30	休舎	居酒屋の会 16時~	
			27	28	29	30	31	9月1日	2
				読書会 13:30		映画会 13:30			写経会 13時半
			3	4	5	6	7	8	9
				写経会 13時半		映画会 13:30		詩話会 13:30	
			10	11	12	13	14	15	16
				読書会 13:30		映画会 13:30			

映画会
毎週木曜日
13時半から

詩話会
9月8日(土)
13時半から

写経会
9月2日(日)
9月4日(火)
13時半から

読書会
8月28日(火)
9月11日(火)
13時半から

8/23	13時半	理由なき反抗 (111分)	ジェームズ・ディーン主演。後世に大きな影響を与えたディーンの大熱演。荒ぶるティーンエイジャーをディーンが極限まで演じきった名作映画。
8/30	13時半	なつかしい風来坊 (90分)	山田洋次監督、ハナ肇、有島一郎、倍賞千恵子。さえない中年男と風来坊の奇妙な友情物語。ブルーリボン賞主演男優賞と監督賞を受賞した監督初期の代表作。
9/6	13時半	マディソン郡の橋 (134分)	監督主演のクリント・イーストウッドとメリル・ストリープの共演。たった4日間の恋に永遠を見いだした中年の男女の愛を描いた、大人のラブストーリー。
9/13	13時半	喜劇一発勝負 (90分)	山田洋次監督、ハナ肇、倍賞千恵子。でたらめな放蕩息子の成功物語と頑固親父との愛憎を描く喜劇。「一発」シリーズ三部作の第一弾。
9/20	13時半	めぐりあう時間たち (115分)	ニコール・キッドマン、ジュリアンムア、メリル・ストリープ。三つの時代、三人の女がそれぞれに迎える普通の朝。何気ない一日を交錯する喜びと悲しみを描く感動作。

まだまだ暑い日が続いていますが、わが家の畑では冬の野菜のための土作りをしている最中です。大根と白菜、人参にネギ、いずれもキムチやたくあん、鍋やしもつかれに欠かせない重要な野菜たち。あとは春菊とほうれん草と小松菜があれば、次の冬もおいしい食事が待っているはず。夏は、鳥も虫も雑草も木々も生命力に溢れ、ちょっと油断をするとわたし達人間はその生命力に圧倒されて夏バテにもなりかねない季節です。でもその夏にこそ、来たるべき冬に備えて生きものたちはそれぞれのやり方で、いのちを繋ぐ算段をしているのでしょう。大げさかもしれませんが、私の冬野菜作りの準備も、その一つとして考えれば精がでるというものです。夏をちゃんと過ごすことの出来なかった生きものは、秋から冬そして次の春へと、うまいのちを繋ぐことが出来るのか心配です。

「春暮れてのち夏になり 夏果てて秋の来るにはあらず」注1 季節は突然変わるのではなく、春の中に夏の兆しがあり、夏の中に秋の兆しがあるということ。だから生きものもその兆しを感じ取り、次の季節に備えた準備をしていくのでしょうか。この時期は24節季で言うと立秋から処暑、白露の節です。日々秋と夏が交互に入れ替わり次第に草に降りた露が白く光り秋を実感する季節。変化は行ったり来たりしながら流れ、気づくと秋の側にたどり着いているという次第です。ところが、最近の気候の移り変わりは極端で、行ったり来たりの緩やかな変化を省略して、いきなり春から夏、夏から秋、とデジタルに変化しているように感じます。これは地球の温暖化の中で、日本の自然が緩やかな季節の変化を許されなくなったからなのか、それとも私達が変化の中にある兆しを感じ取る感受性を失い、変化の結果だけを見るようになってしまったからなのか。

「縁起」はお釈迦様の悟りの根本をなすものです。すべては原因と条件が互いに関係し合って起こるものであり、決して自立して起こるものではないということ、であれば条件と原因がなくなれば自ずからその結果もなくなるという悟りの内容です。秋という変化の原因（兆し）はすでに夏の中に条件として内包されていることをあきらかにできれば、自ずと秋という変化に対処できるということでもあります。これは太古の昔から生きものがいのちを繋ぐために、記憶の中にセットされ続けてきた生きる知恵です。それぞれの生きものがその記憶を受け継いでいくことが、いのちを繋ぐことなのです。お釈迦様は私達が生きていく毎日の中に永遠のいのちを観ることを教えてくださいました。わたし達のいのちは自立して存在するのではなく、縁りて起こる永遠のいのちの一つであることを、お釈迦様の「縁起」の悟りは教えて下さったのです。それは物理的な生命の生死によって途切れてしまう幻の道ではなく、永遠の過去から永遠の未来へとつながる一本の揺るぎない道であり、安らぎのところへと私達を導く道です。その道は行いの道、わたし達の日々の道でもあるのです。

縁りて起こるその条件と原因をありのままに観ることができればその結果は自ずから明かになります。そしてそれをありのままに受け入れ、日常の生活そのものになれば、もうそれは安らぎのところ。ところが人は従容としてその結果を受け入れるには、あまりにも諦めの悪い生きものです。その結果を時には受け入れがたいものとして抵抗し、戦い、技術によって結果を変えようと科学を発展させてきました。ところが人間以外の生きものは条件と原因をいのちを繋ぐ本能として感得しているので、その結果を素直に受け入れ、受け入れきれないものに対しては自らを変化させて受け入れるように努めてきました。環境に生態を順応させてきたということ。人は自らの生態を変えるのではなく、環境や他者を変えることによっていのちを繋ごうと考えてきました。ところがそれは自然や他の生きものや人々のいのちを侵すことでもあるのです。侵されたものたちもいつまでも黙ってはいないでしょう。もしその声は今聞こえてきたら、その声に耳を傾けなければならないはず。最近季節の変化がデジタルで凶暴で極端になってきた。土砂崩れや洪水が頻繁に起こる、火山の爆発や地震も多い。といわれています。統計的に見て結果はそうなのかも知れません。が、そろそろ人は結果を変えるのではなく、その結果がおこる「縁起」をありのままに観ることで、「原因」と「条件」をあきらかにし、結果に対する今やらなければいけないことを審らかにし実行する必要があるようです。もし今わたし達人間によって侵されたいのちの声がこの宇宙に飛び交っているとしたら、その声を聞く感受性と智慧を磨く方法がわたし達には求められているのではないのでしょうか。私にとってその方法は、日常をちゃんと楽しく過ごすこと。冬野菜のための畑の準備も、琉游舎での皆さんとの語りもその一つだと考えています。

この文を書いている今現在、今年はまだ「秋の風の音にはっと気づく」注2 ことはありません。秋の気配はまだなのか、感受性が鈍っているのかどちらでしょうか。注3 「自分の感受性くらい 自分で守れ ばかものよ」注3 秋の気配はまだなのか、感受性が鈍っているのかどちらでしょうか。注3 「自分の感受性くらい 自分で守れ ばかものよ」注3 秋の気配はまだなのか、感受性が鈍っているのかどちらでしょうか。注3 「自分の感受性くらい 自分で守れ ばかものよ」注3

注1：徒然草第155段、注2：「古今和歌集」秋歌上169 藤原敏行

注3：「自分の感受性くらい」茨木のり子

琉游舎：戸井 出琉・恭子

お問い合わせ先：0287-53-7848 08033508152

矢板市大槻2319-17 コリーナ矢板C-850

Mail:toi101izuru@outlook.jp

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/